オーシカ創業120年

「技術のオーシカ」を守り抜く

グルー(Glue)でグロウ(Grow)に

オーシカ（東京都、堀口和秀社長）は創業120年を迎えた。事業の大半が接着剤の開発と普及に費やされ、木質系資材接着剤の最先端を行く会社で、木材産業の進展をともに歩んできた。初期は造作関連が主軸だった接着剤も耐水性や耐久性、さらには健康や環境にも配慮した性能が求められ、オーシカは時代の流れに沿った接着剤開発に携わってきた。なかでも、メラミン樹脂の製造技術を公開したことで、合板をはじめとする木材製品の普及に貢献するなど、自らが標ぼうする「技術のオーシカ」に値する歴史を生み出してきた。こうした飽くなき探求と公平の信念なくして今日のオーシカは存在し得なかったともいえる。

「くっつける」に喜びを感じる会社に
控えめに、そして確かさを求めて

堀口和秀社長

堀口　社長

当社は1905年に初代社長である大鹿守義の父・大鹿由太郎氏が名古屋で紺屋（こうや）の材料である藍（あい）と灰を取り扱う大鹿商店を興し、守義氏が大豆グルーの製造などを通して業容を拡張して食糧と住宅資材にかかわる今日の社名オーシカの前身である「大鹿振興」に改組しました。

木材の薄板を交互に張り合わせることで壁材や床材となる合板は、戦後復興に向け欠くべからざる重要な資材であり、当社は合板製造と同時に接着剤を通じていささかではありますが、木材産業の発展に貢献してきたのではないかと思います。業界からの支援なしに今日を迎えることができませんでした。これまで困難な問題を乗り越えて来ていただいた先達の方々に感謝申し上げます。

時折、取引先から「オーシカとは何ですか」と問われることがありますが、私は「業界の縁の下で役立たせていただいている会社」と答えています。

接着剤とはまさしく何かと何かを結び付けるようなもので、あるものを生み出すことを仲介するまたは支援するようなものだと思っています。当社の接着剤によってより確かな木材製品ができるのだという自負心は社員の皆さんが持ち続けていると思います。

13日に閉幕した大阪・関西万博のシンボルでもあった木製大屋根リングで、木材は2万7000立方㍍利用されましたが、そのうち300㌧近い接着剤の大半に当社品を使っていただいたことは、誠に喜ばしいことでした。木造空間を実現するための接合方法でもあるGIR（グルード・イン・ロッド）接合にも当社のエポキシ樹脂系接着剤が使われるなど、非住宅分野への利用拡大に向けた重大な契機となりました。

業容は当社単独で広がることはありません。建材メーカーや非木質メーカーと連携したモノづくりやゼネコンをはじめとした建設・設計会社とのコラボ、さらにはインドネシアを拠点とした海外パートナーとの協業などを積極的に呼び掛けていく必要があります。当社が作る接着剤の原料は石化由来のものが大半です。温室効果ガス（GHG）の削減の研さんを重ね、環境に配慮した製品作りを目指していきたいと考えています。

技術公開に踏み切った大鹿守義氏の偉大さ

藤井一郎アドバイザー

藤井　氏

当社接着剤の歴史はカゼインから始まり、大豆グルーから大豆カゼイン、ユリア樹脂、そしてメラミン樹脂に移っていきました。

ユリア樹脂の用途は造作材用で、水に強いです。「木材工業界の発展のためならば（オープン化を）やりましょう」と言ったそうで、合板の利用拡大に大きく貢献したと思います。守義社長は、体は大きかったが心も広い人でした。

有明展示場（愛称：有明GYM―EX、※画像は有明体操競技場当時）

その後、構造用としてフェノール樹脂が煮沸すると剥がれる特性を持ち、メラミン樹脂は煮沸しても剥がれない性質でいわゆるT1（タイプワン）です。これを利用して1953年に当社が初めてT1合板を開発しました。耐水のほかに耐久性という機能が付与され合板の汎用度は格段に広がったのです。

62年に堀江謙一さんが太平洋を単独横断した際のヨット「マーメイド号」に当社の完全耐水保証合板が利用されていましたし、64年の東京オリンピックの会場となった国立競技場建設にかかわる型枠にもT1接着剤が使われていました。

大鹿守義社長（当時）がすごいと思ったのは、この製法を特許とせず公開としたことです。今後、多様な樹種の利用が進むとなると、木材の性質に対応する接着剤の研究開発も迫られるでしょう。

また、合板メーカーへは1回10㌧の接着剤を運んでいます。しかし、昨今の物流費やドライバー確保など輸送問題は深刻化しています。今後は取り扱いが容易なパウダー化を求めるところも出てきました。海外のユーザー向けでメラミンパウダーの利用研究も始まっています。来春には商品化を始めたいと考えています。

新潟合板振興、設備一新で再出発

畠中正行執行役員建材事業部長兼大阪支店長

畠中　氏

建材事業部は、新潟合板振興（新潟市、岸博一社長）の製品販売と国産合板、輸入製品、エンジニアードウッド（EW）販売の4つに区分されます。同社は2024年1月の火災事故から復旧作業を続けてきましたが同年5月にホットプレス、25年10月6日からドライヤーを新設し、合板生産量は月間2500立方㍍から4000立方㍍が可能となりました。

うち60%は当社ブランドの「エコ合板」のほか、曲げや防炎、防虫合板や構造用のほか、サワグルミやホオノキ、セン、カバ、ナラなど広葉樹材を原料とする合板などです。

国内合板の販売は、接着剤を販売させていただいている先からの製品販売です。また、輸入製品は合板のほか、ポプラのLVLやブロックボード、造作用集成材などです。

今後、力を入れていくのはEW分野です。業界に先駆けて海外からI型ジョイストやLSLなどの製品を販売してきました。今後も非住宅分野市場を会社を挙げて伸ばしていきますが、国内外のEWの販売を拡大していきます。

EW単体では営業にならないので、木造建築推進グループを母体にして、27年4月をめどに構造設計事務所を開設する計画です。当社エポキシ樹脂を利用したGIR接合の普及活動も進めます。

課題は生産向上を促す接着剤の開発

照屋和巳執行役員化成品事業部長兼推進グループ長

照屋　氏

当社の接着剤販売量は月間4000㌧強で、合板業界では25%のシェア、集成材業界では50%の販売シェアを持っています。

接着剤に関する課題は、省人化に対応して求める品質を作り上げるかということでしょうか。合板の単板含水率（MC）は4%以下ですが、所により10～15%の単板があったとしても接着に影響を与えないとか、さらに熱圧時間の短縮と不良率をいかに少なくする接着剤が求められるでしょう。

工場内の温度環境にもよりますが、冬季の生産性向上や接着剤の塗布量削減方策など、ユーザーからは単価を抑えたものなどさまざまな要望が来ています。合板製造においてはコールドプレスを経てホットプレスから搬出されるまでの時間短縮は喫緊の課題だし、集成材製造においては、耐水や耐熱、耐候性が付与された一液型の高比重材接着を要望されるところもあります。

加工現場からの声重視

兼城健司執行役員中央研究所所長

兼城　氏

中央研究所は当社の生命ともいえる研究開発事業の核となる場所で、木材業界の新規接着剤がここから開発されたといっても過言ではないでしょう。

当研究所は木質系建材を製造するに当たって何らかの機能を有することが基本でありますが、これまでの石化原料からリグニンフェノールのようなバイオマス系接着剤への開発を進めるなど、環境に配慮した製品の研究開発を一段と進める段階にあります。

そのために、私たち研究者が研究所にとどまっているのではなく、顧客の工場に入り、現場作業員の方から生の声を聞かせていただき、それを次の研究に生かすことを行っています。

また、これまで開発してきた接着剤の機能を生かして接着剤とは異なる製品の開発を目指していきたいと考えています。接着剤のオーシカがある商品を開発することで、違ったイメージに変身していく姿も良いのではないかと思っています。

オーシカ120年の歩み

西暦	和暦	年	出来事
1900	(明治33)		大鹿守義氏誕生
05	(38)		守義氏の父、大鹿由太郎氏が"阿州藍と紺染糸"の商いを目的として、名古屋葛町に合資会社大鹿商店を興す（創業）
36	(昭和11)		合資会社大鹿商店を大鹿物産㈱に組織替え、名古屋にペニヤグルー㈱を設立。大豆グルー接着剤の製造・販売を開始
43	(18)		大鹿守義氏が食糧と住宅資材を商う大鹿振興㈱設立
45	(20)		東京都板橋区で合板製造開始
53	(28)		メラミン樹脂によるタイプ1合板用接着剤を開発
55	(30)		タイプ1合板を「鹿印完全耐水保証合板」（ウォーター・プルーフ・プライウッド）と命名し、生産販売を開始 （登録日：1965年3月3日　商標：タイプ1/完全耐水保証合板）
62	(37)		新潟合板振興㈱設立
64	(39)		岡山県倉敷市に水島化学振興設立、大鹿振興㈱接着剤工場を草加に移設（69年設立、草加化学振興㈱の前身）
69	(44)		愛知県半田市にペニヤグルー㈱の接着剤工場を設立
71	(46)		守義氏に勲四等瑞宝章 トラスジョイスト社と大鹿振興㈱がTJIジョイスト（世界初100%木製I型ジョイストで業務提携）
92	(平成4)		大鹿三郎氏が2代目代表取締役社長に就任（6月）
95	(7)		インドネシアのジャカルタ市に合弁会社ポリオーシカ社設立
2000	(12)		本社を現住所（板橋区舟渡）に新築移転
01	(13)		社名を株式会社オーシカに変更 ペニヤグルー、水島化学振興、草加化学振興の3社が合併しオーシカケミテック㈱を設立 水谷新氏が3代目代表取締役社長に就任（6月）
07	(19)		宮本博信氏が4代目代表取締役社長に就任（6月）
08	(20)		日本木材加工技術協会で「ホルムアルデヒドキャッチャー剤"ディアムッシュ"の開発と商品化」で木材加工技術賞受賞
14	(26)		PT.OSHIKA INDONESIAを設立
18	(30)		堀口和秀氏が5代目代表取締役社長に就任（6月）
22	(令和4)		日本木材加工技術協会で「天然物を原料とした環境配慮型木質材料用接着剤の開発と合板への実用」で木材加工技術賞受賞